

# 経済為替ニュース

SUMITOMO MITSUI TRUST BANK, LIMITED FX NEWS

第2148号

2013年02月04日（月曜日）

## 《 striking distance to all-time high 》

その前3週間とはちょっとパターンの的に違いましたが、「週末の金曜日に株は高値になり、為替は円安が一段と進む」という大きな筋書きは変わらない先週でした。ここから見て取れるのは「世界的な株高、そして円安」の動きの強さです。いつ調整局面を迎えてもおかしくない状況（幅とスピードの両方が大きく速いので）ですが、この二つのトレンドの底意は極めて強いと言える。何よりも目に付いたのは、ニューヨーク株の上値追い傾向の強さです。指標であるニューヨーク・ダウ（工業株30種平均）は金曜日の日中ずっと高い水準に張り付き、引値で149.21ドル高の14,009.79ドルとなった。

あとで触れるようにアメリカ経済がそれほど好調なわけでもないのに（過去の繁栄に比べれば）、この株価の高さにはやや違和感を覚える向きも多いかも知れない。なにせ、ニューヨーク・ダウの史上最高値は2007年10月に記録した14,164.53ドルですから、来週金曜日の引値よりちょっと大幅に上げれば、その時点で「ニューヨーク・ダウ 史上最高値更新」と新聞の見出しが躍るはずの状況。従って今週の前半は高値更新を巡って市場は少しは揉むかも知れない。

株価を押し上げるに相応しい良いニュースは確かにありました。例えば金曜日に発表されたアメリカの雇用統計。1月の伸び（非農業部門就業者数）は15万7000人（予想よりちょっと少ない）とまずまずだったが、それ以上に去年11月、12月の同就業者数の伸びが大幅上方改訂されたこともあって、「去年一年間の月間平均非農業部門就業者数の伸びは18万1000人と、当初発表の15万3000人より増えた」ことが材料視された。ベンチマーク改訂の影響が大きい、「予想以上に去年の米経済の雇用創出力は強かった」というわけだ。しかし同時に発表された1月の家計調査による失業率は7.9%で、相変わらず高い。つまり手放しで喜べる状況ではない。

もっとも懸念は残しながらも、アメリカ経済が徐々に往事の強さを取り戻しつつあるのは間違いない。少なくとも株価はそれを「先取り」をしている。例えばリサーチ会社であるAutoData社によると、米1月の自動車（car and light-truck）販売台数は全体で見ても昨年同期を14%上回って104万台となった。この月間販売台数が続けば、アメリカは中国に「世界第一位」の地位を奪われている新車販売台数において、リーマン・ショック以前の台数に戻ることが出来る勘定だ。もっとも世界一位に振り返るか中国の販売台数動向次第で不明だ。

ちょっと中味に触れておくと、日本のトヨタ自動車の復調が著しく、1月の販売台数は約27%も増えて、販売台数は157,725台となった。その他の大手自動車メーカーも大部分が「二桁の伸び」となって、GMは16%増加の194,699台。再びGMとトヨタの差が縮まってきた。クライスラーも16%の伸び、フォードは22%の伸び。リーマン・ショックのあと大幅に落ち込んでいたアメリカの新車販売は、各種の割引セールス策もあるが、買い換え需要の旺盛もあって着実に勢いを取り戻しつつある。米経済の全体的な成長率は第4四半期で2.2%（GDP伸び率）と低いですが、株価は個々の指標の強さに反応している。

### 《 Miles Davis recorded “Kind of Blue” in 1959 》

株価が高いのはニューヨークだけでは無論ない。世界をリードしているのは日本の株で、先週の上げで東京の株は「12週連続の上げ相場」となった。54年ぶりの出来事。この週末に読んだニューヨーク・タイムズには東京発で実に笑える記事があった。

「TOKYO — The year 1959 was in many ways remarkable. America granted Alaska and Hawaii statehood, Fidel Castro took power in Cuba and Singapore gained its independence from Britain. The Barbie doll and pantyhose went on sale for the first time; Miles Davis recorded “Kind of Blue” at a New York studio.

Until Friday, 1959 was also the last time the Nikkei 225 stock index rallied for 12 straight weeks, driven by the quickening pace of Japan’s postwar economic boom. Now the index has repeated that feat, rising 0.47 percent to 11,191.34 on Friday to finish the week up 2.5 percent.」

マイルス・デービスが「Kind of Blue」をニューヨークのスタジオで録音したのが1959年だとは知りませんでした。が、「いずれにしてもそんな前」ということです。確かに「12週連続の上げ」というのは強い。なにせ一年は52週ですから、「12週連続」の意味合いが分かるというものだ。世界的な株高の背景については先週も書きましたが、やはり金融のスタンスが株価に大きな影響を与えているのと、今までさんざん探してきた「不況下でのお金の行き場」という観点から、「株」が再び注目されてきたという影響が大きいのだと思う。

日米だけではなく欧州の株も強いし、景気指標で明るいものがいくつか出たアジアの株も大きく上がっている。明るい指標としては例えば、中国物流購入連合会が1日発表した1月の製造業購買担当者景気指数（PMI）。指数そのものは50.4（前月より悪い）だったが、景気の拡大・悪化を判断する節目となる50を4カ月連続で上回ったのが好感された。PMIは全国の製造業820社へのアンケート調査をもとに算出。製造業の景況感を反映し、生産や受注などについて50を上回れば拡大、下回れば縮小を示す。

ちなみにこれとは別に発表されているHSBCの「中国PMI」は、52.3と12月の

51.5を上回って、2年ぶりの高い水準を記録した。その他の国の統計も合わせて、マーケットでは「アジアの景気鈍化の最悪期は過ぎた」という声も聞かれた。世界的な株高のトレンドは、「世界の金利が上昇の気配を示すまではしばらく続くだろう」とも思う。金利が上がり始めれば、大きな調整が来る。

為替は引き続き週末にかけて大きく円安に振れている。ニューヨーク市場の金曜日の引値を見ると、ドルが92.85-90、ユーロが126.48-52、オージーが96.42-49。また一段と円安が進行した。特に大きな円安材料があったわけではないが、先週末までと同様に「円の相場水準の見直し」が続いている印象がする。アメリカの復権（世界最大の産油国へ）、欧州景気の底打ち感も円安を後押し。この傾向も調整を挟みながら暫く続くだろう。

-----

今週の主な予定は以下の通り。

02月04日（月曜日）	ユーロ圏12月生産者物価指数 米12月製造業受注指数
02月05日（火曜日）	米1月ISM非製造業景況指数
02月07日（木曜日）	対外及び対内証券売買契約等の状況 日本12月機械受注 日本12月景気動向指数・速報 米2/3までの週の新規失業保険申請件数
02月08日（金曜日）	日本12月经常収支 日本12月貿易収支 日本1月景気ウォッチャー調査 米12月貿易収支 米12月消費者信用残高

### 《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。暖かい週末でした。春が接近したことが分かる。しかしそれにしても「日本は東西にも長い」と今週は思いました。一番西には大分県と熊本県の県境（地熱発電の取材）に、東では山形県の天童（旅行）まで移動しましたが、目の子で「この二つの地点は日の出が40分は違う」と思いました。当然西の方が遅い。「南北に長い日本列島」とよく言いますが、これは「誤解を招く」と思いました。日本列島は東西にも長い。時差も目立つほどある。

ところで今週は良い本を二冊発見しましたので紹介します。北京の空はようやく2月に入って晴れてきたようですが、まあ1月の半ばからは汚染物質を含んだ空気の酷かったこと。この一事をもってしても「中国型成長パターン」が限界に近いことは明らかですが、今日紹介するのはどちらも中国本です。

「中国が普通の大国になる日」(柯隆 / 日本実業出版社)

「中国 目覚めた民衆 習近平体制と日中関係のゆくえ」(NHK 出版 興梠一郎著)

合わせて読めば、「今の中国」が非常に良く分かります。その抱えている問題がなぜ生じてきたのか、そして今後どう展開する可能性が高いのか。

ご存じの通り、「濃霧」問題を含めて今の中国には非常に多くの難問がある。開発独裁の中でうまく回ってきたシステムが一举に暗転している。日本では誰もが「お隣の、大きな、そして人口の多いあの国はこれからどうなるのだろう」と思っている筈です。この二冊の本は、その中国を見る視点を鋭くする上で非常に役立つ。この二人の中国専門家がこの大国に大きな危機感を抱いていることは明確。それは我々と同じですが、違うのは情報量が圧倒的に多いと言うことです。中国語が出来ない人間(私のような)には、「やはりそうなのか」「え、そうなのか」と確認・発見できることが多い。

二冊とも具体性に富んだ本ですが、興梠さんの本が個々の個人、従って民衆が登場するのに対して、柯隆さんの本は今の中国という国の“システム”に問題意識を強く持って書いている点が違う。ご一読下さい。それでは皆さんには、良い一週間を。

《当「ニュース」は三井住友トラスト基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、三井住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したのですが、正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》